ある戦場の日常

ちゃけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある戦場の日常

【Ｎコード】
Ｎ３９６２Ｉ

【作者名】
ちゃけ

【あらすじ】
どこにでもいる若者が戦争という巨大で冷たく重いものと向き合いながら生きていく物語です。

序章（前書き）

この小説は第一次世界大戦を題材にした“西部戦線異常なし”という映画の影響をモロに受けています。その点に留意してご高覧ください。

序章

その日世界は大きく揺れた。

一弱小国家に過ぎないイステェリア王国において膨大な量の精霊石が埋蔵されている事が判明した。

精霊石とはこの世の中のあらゆるものに宿ると言われる精霊が死後その力を増幅させ結晶化したものであり、あらゆる産業の大事なエネルギー源となっている物質である。

近年精霊石の発掘量が減り各国の経済活動が停滞し始めていたのである。その最中での情報であり各国は挙ってイステェリア王国に採掘権を要求していた。その中でも精霊石消費量が世界一で世界屈指の軍事国家であるフロニティア帝国は半ば脅迫にも似た要求を続けていた。

それに対しイステェリア王室は断固拒否をし、開戦もやむなしという意見が日に日に強まっていた。

しかしイステェリア王国の常備兵力は陸海空軍合わせて２８万人に過ぎない。それに対しフロニティア帝国は陸軍だけでも１００万人、海軍５０万人、空軍１５万人もの兵力を常備しており世界最強の国家として恐れられている。

また国家の歳入は２０倍以上、人口は１０倍以上も違い戦争回避論も根強く残っていた。世論は真っ二つに分かれた。

そんな中アドロア歴１９１４年、３５個師団の大軍を持ってイステェリア王国、プラノ平原に侵攻を始めた。のちにプラノ戦役と呼ばれる戦争の始まりである。最初の時点では圧倒的な戦力差にイス

テェリア軍は敗北を重ねていたが、友好国であるガルマニア帝国からの支援を受け何とか戦線を維持している状態であった。
そして開戦から2年目の秋、フロニティア帝国は予想以上の大損害を出し一時的に侵攻をストップし膠着状態となった。
イステェリアも戦力補充の為民間人の招集を始め戦力の回復に努めた。

そんな中軍隊に召集され戦場で生にしがみ付こうと必死になって戦う若者達がいた。

第1話　召集

イステェリア王国首都、リームに住む青年ブルーノ＝ブルースは悩んでいた。

現在イステェリア王国は滅亡の危機に瀕していた、超大国フロニティア帝国の侵略されるのではないかという強いプレッシャーを感じていた。

青年の実家は精霊石からエネルギーを取り出す仕事をしており王室からも兵役を免除された特権階級に位置していた。そのため比較的平穏な生活をすることができていた。

幼い頃から精霊石を見ている青年にとってどれほど重要なものであるか、また侵略してでも入手したいというフロニティア帝国の気持ちが嫌と言うほど分かっていた。その価値は1国の栄枯盛衰を左右するほどの価値があると。

青年は戦争が嫌いであった、昔から虫も殺せず食事は殆ど摂らない、何かの命を奪うくらいなら死んだほうがマシだと思っていた。そしてこんな戦争など早く終わればいい。そういった感情を持っていた。

しかし世論は青年の思想を許さなかった。街頭では口々にまた学校では教師達が挙って開戦論を唱え、反戦論者とのトラブルが耐えない。彼は内心反戦論者を応援していたが開戦論者の意見も正しいということは理解していた。

そして反戦論者はフロニティア帝国が侵攻を始めたと同時に反戦論者は姿を消した。

青年の通う学校では教師達が自分達の息子や兄弟が戦場で華々しく戦い名誉の戦死を遂げる話を得意げに話している。それに対し青年

は冷ややかな視線を送っていた。

ある秋の日、ブルーノは担任の教師に呼ばれ職員室に入った。教師達の視線が痛い、そう思いながら担任の机の前に立った。すると担任はブルーノの前に立って胸を張った。

「ブルーノ＝ブルース君、君だけだぞ。我がクラスで軍隊に志願していないのは。」

「ああ、いや・・・すいません。気持ちは分かるんですが家業があるんで。」

ブルーノは担任から目をそらした。

担任は突然机を叩き高らかに軍歌を歌い出した。その歌は兵士が勇ましく戦い死ぬ事ほど美しいものはないという歌であった。歌い終わると担任は椅子に座り言葉を続けた。

「いいかね、ブルース君。君の家は精霊石の精製という大事な仕事をしていることは知っている、そのため兵役も免除されている事も知っている。だがそれでいいのか？」

「と、申しますと？」

「男子たるもの勇敢に戦うこと、それは昔から言われている事である。仮にこの国が敵に奪われたらどうなる。人民は皆殺しにされ大切な家族がひどい目に遭うんだ。君には大事な妹さんがいるだろ。どうなってもいいのか？」

担任の言葉にブルーノはふと自分の妹の事を思い出した。彼の妹は病気の為ずっとベッドで寝ている。最近体調が良く医者からも快方に向かっていると言われ将来の夢も語り合うほどになっていた。そんな妹が惨殺されるのを黙ってみていられない。ブルーノは何か吹っ切れた表情を浮かべ担任の顔を覗き込み叫んだ。

「先生。私も戦場に行きます。家族の為、そして男子の使命として！」

それを聞いた担任は嬉しそうな顔をして再び軍歌を歌い出した。す

るとクラスメイトが職員室に雪崩れ込みブルーノと肩を組みいっしょに歌い出した。さらに他の教職員も一緒に歌いだしブルーノも一緒に歌い出した。

家に帰りブルーノは兵士になる事を家族に伝えた。父親は大喜びで彼を抱いた。

「ブルーノ、さすがは私の自慢の息子だ。よく決心したな。」

「はい、父さん。僕は家族の為、国家のために一生懸命戦います。」

「いい面構えだ。早速近所の服屋に頼みお前の軍服を注文するとしよう。」

そういうと家を飛び出した。父親を見送り家の中に入ると母親と妹が複雑そうな表情でブルーノを見つめていた。

「ブルーノ、本当にいいのかい？」

「母さん、大丈夫だよ。家業は父さんがいるから大丈夫さ。」

「家業なんてどうでもいいよ。あんた自身だよ。死んでしまうかもしれないよ。」

「大丈夫、僕はそう簡単には死なないよ。必ず生きて帰る。」

「お兄ちゃん、私最近よく夢を見るの。お兄ちゃんが二度と帰って来ない夢を。」

そういうとブルーノの妹はワンワンと泣き出した。滝のような涙を流しながら。

その様子を見ていたブルーノは笑顔で妹の頭を撫でた。

「お兄ちゃんが今まで嘘ついたことあるか？ないだろ。安心しろ。」

「うん。」

「母さん、父さんの事は頼むよ。僕には分かるよ。さっきの父さん、空元気だったよね。１８歳になれば嫌でも分かるよ。」

母親は俯いた。目には涙を浮かべていた。

「自分の子供が戦場に行くなんて耐えられないよ。うちは兵役免除されているんだから無理に行かなくていいんだよ？それに我が子が敵兵を殺したり戦死するような事があれば・・・」

ブルーノは机を叩き言葉を遮った。
「母さん、僕じゃない誰かなら敵兵を殺したり、戦死しても良いということかい？それは違うよ。誰かがやらないといけないんだ。」
ブルーノは蛇口を捻りグラスに水を注ぎ一気に飲み干した。
「ごめん。もう寝る。明日は健康診断があるから。」
そういうと2階にあがり自室のベッドに潜り込んだ。

その夜彼は興奮して一睡もすることができなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3962i/

ある戦場の日常

2010年10月28日07時30分発行